

私、さらわれちゃいましたっ！

第一章 ニートさんに買われました

定食屋『うめたに』の開店は、十一時。紺に白抜きの暖簾を出して、それを知らせるのは私の仕事だ。

「ああ、今日もいい天気」

いつものように、暖簾を抱えて店の外に出た私は、空を眩しく見上げた。

「暑い一日になりそうだなあ」

じりじりと肌を焼く日差しが降り注ぎ、蝉の歓喜の音が木霊する。大きな入道雲がむくむくと広がって、その向こうには一筋の飛行機雲が見えた。お盆も過ぎたけれど、まだまだ夏真っ盛りだ。

「寿々ちゃん、おはよ！ 今日の日替わり定食はなんだい？」

入り口に暖簾をかけていると、後ろから声をかけられたので振り返る。そこには、お店の常連である武中さんがいた。タクシー運転手の彼はいつも開店と同時にやって来て、早めの昼食をとる。

「おはよう、武中さん！ 今日、酢豚だよ。夏野菜がいっぱい入ってて、これを食べれば夏バテ知らず。キュウリの冷や汁に、茄子の揚げ浸しもあるよ」

「おお、いいねえ。じゃあ、日替わり定食、ご飯大盛りで頼むよ」

体は大きい強面^{こわもて}だけど、性格はとてもおっとりしていて優しい。武中さんはここにこと笑いなから、暖簾^{のれん}を潜^{くぐ}った。

私も、その後に続いて店の中に入る。そして厨房^{ちゆうぼう}に向かって「日替わり一つ、ご飯大盛りで！」と大きな声で言うのだった。

駅から少し離れたところにある『ひなぎく商店街』。昔ながらの雰囲気を残したそこは、いかにも下町といった、どこか懐かしい空間だ。その商店街の一番隅にあるのが、定食屋『うめたに』。私、梅谷^{うめたに}寿々を育ててくれた伯父夫婦が経営している店だ。

店内は、カウンター席が五つ、四人掛けのテーブル席が五つと、小ぢんまりとした造り。おすすめメニューは、ふわふわとろとろの玉子がのった親子丼。ふりふりしたお肉と、丼^{どん}つゆがしみ込んだご飯が堪^{たま}らない。過去にはテレビの取材を受けたこともある、自慢の品だ。

その日のおすすめ食材を使った日替わり定食も美味しいし、定番メニューの豚^{とん}の生姜焼き定食も根強い人気がある。夜だけ提供される一品料理も、みんなお酒にびったりで、とても喜ばれている。商店街でも結構な人気店として知られ、昼時になるとよく行列ができる。

私は、高校生の頃からこの店を手伝っており、短大卒業後には従業員として働くようになった。少しでも、恩ある伯父夫婦の助けをしたかったからだ。

私は、十歳の時に両親を車の事故で亡くしている。私はその車に同乗してはいなかったけれど、突然家族を喪^{うしな}うこととなった。一人残された私を引き取ったのが、父方の伯父夫婦。子どものいない彼らは、私を可愛^{あい}がって育ててくれた。

夫婦で切り盛りしている小さな定食屋だから、裕福とは言えない。それでも、私には不満なんて何一つなかった。

誕生日は一緒にお祝いして、休日には近場^{ちかばた}だけれど遊びに連れていってくれる。伯母は仕事を抜け出して授業参観に来るし、伯父はどこのお家よりも豪華なお弁当を作って運動会に来てくれた。両親を喪^{うしな}った寂しさに長く囚^{とら}われずに済んだのは、彼らの優しさのおかげ。

短大卒業後の進路について話が出た時、私は迷わず『うめたに』で働くと言った。伯母は体があまり丈夫でなくて、体調を崩すことも多い。しかし、夫婦で営む小さな店では休むこともままならず、いつも無理を押して店に出ていた。私はそんな伯母の助けになりたかったのだ。

そして、働き始めて二年が過ぎた。
伯父夫婦と一緒に『うめたに』で働けるのは、とても幸せだ。

狭いけれどきちんと掃除された店内は、居心地がいい。お客さんたちはみんな優しく、にこにこしていて、美味しそうに定食を食べてくれる。そんな姿を見ていると嬉しくなる。

「寿々ちゃん、今日も来たよー。とんかつ定食ね！」

「お、今日の日替わりは酢豚^{すた}か。じゃあ俺は日替わりもらおうか」

「はいー！ かしこまりました！ こちらお待ちせしました、生姜焼き定食です！」

注文を取って、料理を運んで。店内をぐるぐると動き回るのはすごく楽しい。我ながらなかなかの働きぶりだし、こういうのが天職^{てんしやく}っていうのかなあと思う。時間が経つのも、あつという間だ。

少し客足^{きやくそく}が落ち着いたなと思って壁掛け時計を見上げたら、午後二時に差し掛かるうとしていた。

うわあ、もうこんな時間。その時、店の引き戸が開いて、お客さんが一人飛び込んできた。
「うう、雨が降ってきたぜ。濡れちゃった」

「え、雨？」

朝はあんなにいいお天気だったのに？ 驚いて戸を開けてみれば、いつの間にか空はどんよりとして、地面には大粒の雨が叩きつけられていた。

「午前中はあんなに晴れてたのにねえ。このタオル、よかつたら体を拭くのに使つて下さいな」
伯母がお客さんにタオルを渡しながら言う。

「夕立にはまだちよいと早いなあ。いらつしやい。最近、天気が落ち着きませんねえ」
少し手が空いたらしく、厨房から顔を覗かせた伯父も言う。

「寿々、タオルを少し出ししといておくれ。他にも濡れてこられるお客さんがいるかもしれない。あ、あと帰りに貸してあげられる傘も」

「うん、分かった」

店の裏手は自宅になつており、厨房からドア一枚で行き来できるようになっている。

私は自宅に行き、数枚のタオルと、何本かの傘を持つてお店に戻る。すると伯母が「タオル、あちらに渡してあげて」と言った。

「はい。あ」

入口を見た途端、私の視線が止まる。

そこには、男の人が立っていた。『うめたに』の常連さんの一人だ。

年は三十手前くらい。セットとは無縁の、ぼさぼさの髪がトレードマーク。格好は着古したTシャツに、ダメージジーンズ。それに、背中のメッセンジャーバッグと、履き込まれたスニーカーが加わる。だけど、それらを纏う体躯はモデルさんのようで、背はすらりと高く、手足も長くてバランスがいい。

わあ、今日も来てくれたんだ。思わず心が跳ねる。ほつぺたがむずむずして、口角が自然と上がってしまった。

「いらつしやいませ。あの、タオルどうぞ」

声をかけると、彼は私の方を向いた。顔の作りが分からないほど長く伸びた前髪からは、雫がぽたぽた滴り落ちている。

「わあ、びしょ濡れじゃないですか！」

「急に降り出すもんだから、びつくりした。天気予報、雨なんて言つてなかったけどな」

ありがとう、と言つて彼はタオルを取り、髪や顔を拭う。そうして「日替わり一つ」と続けた。

「はい、日替わりですね。日替わり一つー！」

厨房に声をかけ、それから彼の方に視線を戻す。

「カウンターでいいですか？ あそこが空いていますので」

ああ、と頷く彼に、お冷を持つてこようと、踵を返す。

その途端、つると足が滑った。ぐるんと視界が回り、ああ、転んじゃう、と思ったその時。

ひよい、と体を支えられる。

「大丈夫？」

ポカンとしている私の顔を覗き込んだのは、まだ前髪を湿らせた彼だった。茶色い前髪の奥にある榛色の瞳が、真っ直ぐに私を見つめている。

近い。こんなに距離が近いのは、初めてだ。それに、私の腰には今、彼の逞しい腕が回っている……。鼓動がドキドキと速まり、私は息苦しさを覚える。ほっぺたが熱いから、きつと真っ赤になっっているに違いない。

お、お礼を言わなきゃ。でも、喉の奥が麻痺したみたいに動かない。

「ありがとうございます、ます」

どうにか言葉を吐き出すと、彼はふう、とため息をついた。

「そこ、床が濡れる。気を付けた方がいいよ」

「は、はい」

私を立たせた彼はタオルを首にかけ、カウンター席に座った。それから何事もなかったかのようになり、背負っていたメッセンジャーバッグから漫画を取り出して、読み始める。

「寿ちゃん、大丈夫だった？ ごめんなさい、さっきそこにお冷を零して、拭くところだったの」
雑巾を手にした伯母が申し訳なさそうに言う。

「大丈夫だよ、伯母さん。ニートさんが助けてくれたから」

小声で言うど、伯母はほっとしたように笑った。

私は、まだドキドキしている胸元にそっと手を当てて、彼の方を窺い見る。

少し、近づいちゃった。ああ、もっと、お話できたらいいのになあ。お名前とか、知りたいのになあ。

だっていつまでも『ニートさん』って呼ぶのは、さすがに申し訳ないって思うんだもの。

——そう、私は名前を知らない彼のことを、密かに『ニートさん』と呼んでいるのだった。

彼はもう何年も前から『うめたに』に通ってくれている。注文するのは、決まって日替わり定食。好き嫌いがいいのか、いつもきれいに残さず食べる。

注文してから料理が出るまでと、食事の後の少しの間、彼はいつもメッセンジャーバッグの中に入れてある漫画を読む。そして、それを読み終えたところでふらりと帰っていく。昼食時と夕飯時、一日に二回来る、なんてこともある。

『学生でもなさそうだし、一体何の仕事してる人なんだろうね』

『平日の昼間に、あんな格好でふらついているんだ。テレビでよく聞くニートってやつじゃないか？』

『今は就職難らしいものねえ。でも収入がないのに、こんな頻繁に外食して大丈夫なのかしら』

伯父たちが彼のことをこっそり『ニートさん』と呼んでいるうちに、そのあだ名は私の中ですっかり定着してしまった。ニートさんはそんなことはつゆ知らず、毎日のようにやってきては日替わり定食を食べ、漫画を読んで帰っていく。

私は、このニートさんが随分前から気になっていた。

彼は、あまりしゃべらない。店に入ってくる時に「どーも」と言い、「日替わり」と注文して、帰る時に「ごちそうさま」と言う——それくらいだ。

だけどたまに、話しかけてくれる。私が普段と違う時に限って。

『今日は元気がないね。どうしたの？』

『喉、少しおかしいね。マスクして、こまめにうがいしたほうがいい』

『いいことあった？ ニコニコしてる』

他のお客さんどころか、伯父たちでさえ気付かないわずかな変化。彼はどういうわけかそれを察知して、声をかけてくるのだ。そうして、私が事情を話したら、長い前髪の下でそっと笑ってくれる。

『それは君の気にしすぎ。相手はそんなこと、もう忘れてる。だけど、反省してるんならこれから気を付ければいいんじゃない？』

『のど飴^{あめ}、あげるよ。早めに対策を取っていたら悪化しない』

『よかったね。それは君が頑張ったからだ』

心地よく響く低い声は、いつだって穏やかで優しくかった。

どうして彼は、こんなにも私のことを分かってくれるんだろう。

最初はただただ不思議で、でもだんだん、それが嬉しくなってきた。店の隅で漫画を読む彼の存在を感じるだけで、見守ってもらっているような気持ちになった。

ニートさんは、私のことをどう思っているのかなあ。しょっちゅう顔を合わせているけれど、私は彼のことを全然知らない。もっと知ることができたらいいなあ。まずは、名前から。

私はニートさんをそっと窺^{うかが}いながら、いつもそう思うのだった。

そんな彼は、少し遅めの昼食を終え、今日も漫画を開く。

少年漫画が好きみたいだ、というのは表紙をこっそり見て知ったことだ。私が読むのはもっぱら少女漫画だけど、少年漫画も読んでみようかな、なんて最近思っている。同じ本を読んでいたら、話すきっかけができるかもしれない、なんて。

漫画を読み終えるとニートさんは立ち上がり、代金を支払い、「どーも」と言って店を出ていく。私はその背中を追いかけた。

「待って下さい。あの、よかったら傘、使ってください」

「いいの？」

軒下^{のきした}で立ち止まった彼の言葉に頷く。

「はい。次にいらした時に、持ってきていただければいいので、どうぞ」

傘を開いて、差し掛ける。えへへ、と笑いかけると、ニートさんは「ありがとう」と言って受け取ってくれた。

「じゃあ、また来る」

「はい！ お待ちしております」

そう言っ私は、降りしきる雨の中を帰っていく広い背中を見送った。

えへへ、今日はいつよりもより多めにお話できちゃった。雨、これから好きになっちゃうかも。

そんなことを思っていたら、突然店の中から大きな音がした。次いで、伯母の悲鳴が聞こえる。

「何!?!」

何があったの？ 急いで店内に戻る。

ざわめく店内。厨房から、「あなた！ あなた!」と叫ぶ伯母の声がした。

「伯母さん、どうしたの!？」

厨房に飛び込んだ私の目に、顔を真っ白にして呻いている伯父と、その伯父に縋りつく伯母の姿が映る。伯母が私に気付けて叫んだ。

「救急車を呼んで！ お腹を押さえて、急に倒れたの！ 寿々ちゃん、救急車！」

「俺が呼んだ！ 外に出て、救急車を誘導してくるよ」

お客さんの一人がそう言っ、外に走り出た。

「さっきまでなんともない様子だったのに、どうして？ あなた、すっかりして！」

伯母が声をかけるも、伯父は意識が混濁しているようだった。食いしばった歯の隙間から、弱々しい呻き声がする。

「伯父さん、伯父さん、すっかりして。大丈夫だからね!？」

伯母の横にしゃがみ、伯父の手を握る。血の気の失せた手はひんやりと冷たくなっていた。私は涙声になりながら、伯父を励まし続ける。

急に、何が起ったの。

いつもの、なんてことのない穏やかな日が、一瞬でその姿を変えた。

十月の終わりの今日は、ポカポカと暖かい小春日和だ。

柔らかい日の光が、赤く染まりかけた葉の隙間から零れ落ちていく。波模様を描く真っ白な玉砂利に、はらりと葉が落ちる様は、まるでそこが本物の水面であるかのように感じさせる。綺麗に整えられた紅葉の向こうに、鳥が羽ばたき去っていくのが見えた。

穏やかに時の流れる、高級料亭の離れ。

私は長めの黒髪を結び上げ、慣れぬ振袖を着て、その一室にいた。

母の形見である、桃色に赤の牡丹柄の振袖は、二年前の成人式で着た時には嬉しくて堪らなかつた。見る人がみんな、亡くなった母にそっくりだと褒めちぎってくれたから。

私の母は、誰もが見惚れるぐらいに綺麗な人だった。そんな母に面差しが似ていると言われて、嬉しくないわけがない。実のところ、私は母ほど鼻筋が通っていないし、唇もぼつりしすぎているので、そっくりとは言えないのだけれど。それでもこの振袖は、私にとつて大変思い入れのあるものだった。

そんな振袖なのに、今日は全然気持ちを浮き立たせてくれない。帯がやけに苦しくて、重たくて泣き出しそうになる。だけど私は泣くことも、ましてや逃げ出すこともできず、ただ人形のようにじっとお行儀よく座っていた。

目の前の黒い漆塗りのお盆の上に、帯のかかった二万円札の束が積まれていく。それが十個積み上がったところで、上座に座っていた古賀さんが「どうだろう」と笑った。

「少し金額を上げさせてもらったよ。八百万から一千万だ。結婚の支度金としては十分な額ではないかな？」

「ええ、ええ、それはもう」

私の横に座って、目を見開いていた伯母が上ずった声を上げた。

「ま、まさかこんなにご用意していただけるなんて思わなくて、驚いてしまいました。古賀さんがこれほどまで寿々ちゃんのことを気に入って下さっていたんだなんて」

「気に入って？ いや、これは慈善事業のようなものだよ、梅谷さん」

仕立ての良いブラウンのスーツに身を包んだ古賀さんは、首を横に振った。そして座椅子に背を預け、突き出たお腹の前で両手を組むと、肉厚の唇の右端をくつと持ち上げて笑う。

「おたくが金銭的に苦勞していると聞いたから、俺がこのお金で助けてあげることにした。ついでに、若いという以外、何の取り柄もない寿々を嫁に貰ってやることにした。それだけのことだよ」

伯母が、ぐつと息を呑んだのが分かった。古賀さんが細い目をさらに細めて私をちらりと見る。

「三十近くも年下の女に入れ込んだ、なんて世間に思われたくないんだよ、こっちは。いくら五十の男やもめと言ったって、俺には金がある。女なんて選び放題なんだ。何もこの子みたいなの、学も取り柄もない女でなくたっていいんだよ」

ぐつと目じりに深い皺が刻まれる。私はその小馬鹿にしたような視線を受け止め切れず、俯いて膝の上に乗せた両手の甲をじつと見下ろす。手は少しだけ、震えていた。

「まあ若い分、素直だろうから、その点は評価しなくちゃならないか。俺がきちんと教育してやるさ」

「え、ええ……。よろしく、お願いいたします。まだ若い娘ですので、色々教えていただくこともあるかと思います」

伯母が少しだけひきつったような声で言い、私の肩にそつと手を添えた。

「寿々ちゃん、古賀さんのことを信頼してついていくのよ。古賀さんはきつと、寿々ちゃんのことを父親のように温かく守って下さるはずよ」

伯母の言葉に、ゆつくり頷こうとした。けれど、その前に古賀さんが、ふん、と鼻を鳴らす。

「馬鹿言っちゃいけないよ、梅谷さん。俺は『娘』を貰う気はないんだ。俺は、あくまで『女』が欲しいんだよ。俺の世話を何から何までできる、そんな『女』がねえ」

ぐふふ、と笑った古賀さんが、身を乗り出してくる気配がした。と思つたら、突然顎先に触れられ、ぐいと上を向かされる。古賀さんが、値踏みするような目でじろじろ見つめてきた。

「ちゃんとこつちを向きなさい、寿々。俺はこれからお前の主人になる男だぞ」

「……………」

白髪之交じった、薄い髪。ふつくらとした脂性の顔に、細い目。幅広の鼻に厚い唇。私と目が合った途端、古賀さんにはたりと笑って唇をべろりと舐めた。

「ふん。安いエプロン姿でもそれなりだったが、着飾ればなかなかのものじゃないか。いいか、寿々。これから俺にしっかりと仕えるんだぞ」

安いエプロン……

毎日着てきた、デニム生地のエプロンを思い出す。裾に梅の刺繍が施されたエプロンは、手芸屋の田中さんがわざわざ私のために作ってくれたものだった。あのエプロンを着て、頭には共布で作ったバンダナをかぶって。そんな出で立ちで狭い店内をくると動き回るのは楽しかった。も

う二度と着ることはないけれど……

「寿々、返事は？」

古賀さんの声音が少し、厳しくなる。

「……………」

口を開く。返事をしなきゃと思っっているのに、声が出ない。喉の奥に大きな塊があるようで、苦しい。私は本当に、この人と暮らしていかなくちゃいけないんだ。この人を、好きにならなくちゃいけないんだ。

だって私は、お金でこの人に買われたんだから。

——八月の半ば、お店の営業中に伯父が倒れた。

辛いめに別状はなかったけれど、それでも長期の治療を要する病気が見つかり、入院と手術を余儀なくされた。定食屋の厨房作業はほとんど伯父がしていたから、伯父がいなくては店は立ち行かない。当然休業せざるを得なくなつて、私と伯母は途方に暮れた。

『どうしよう、寿々ちゃん。うちには満足な貯蓄もないのよ……』

伯父の入院は思いのほか長引きそうで、当然治療費もそれだけかかるらしい。おまけに去年お店を改装した際のローンもまだまだ残っている。それらの支払いをすると、伯母と私が二人で働いても生活費すら危うい。伯父の快復が思わしくなければ、店を手放すことになるかもしれない。

そんな時、私に縁談が舞い込んだ。相手は、この辺り一帯の地主である古賀家のご主人。時折店

を訪れていた古賀さんが、私に目を留めたとのことだった。

古賀さんは五年前に奥様を亡くされており、それで私を後妻に望んだらしい。伯父夫婦も最初はこの話を断っていた。古賀さんと私では、二十八歳も違う。父娘ほども年の離れた男に大事な嫁がせられないと言ってくれた。

しかし、古賀さんが支度金の話を切り出すと、様子が少し変わった。それも当たり前だ。お金は今、梅谷家にとつて一番欲しいものだったから。私だってその話を聞いて、これで伯父さんたちを助けられる、と思つてしまつたのだ。

「寿々、返事はどうした？」

古賀さんの顔が険しくなる。私の顎先を離し、返事を待つように腕を組む。私は、「はい」というたった二文字を言葉にできず、だんだん深くなっていく彼の皺を見つめることしかできない。

「梅谷の旦那は快く承諾してくれたぞ。横にいる奥さんだってそうだ。お前は育ての親の顔に泥を塗るつもりか？」

思わず伯母を見た。

数日前、私を伯父の病室に呼び出した時と同じ、何かに耐えるような表情をしている。伯父も今頃、病床で同じ顔をしているに違いない。そう思うと、胸の奥がぎりぎり痛んだ。

——静まり返つた病室の中、ベッドに体を起こした伯父と、その横にそつと寄り添っていた伯母。二人は長い時間、私の顔を見つめていたが、やがて伯父が絞り出すようにして『古賀さんのお話を前向きに考えてはどうか』と言つた。

『古賀さんはこの辺りの名士だ。お前のこともきつと悪いようにはしない。それに古賀さんのところに行けば、お金で苦勞することははない。もう、朝から晩まで注文取りや皿洗いをしなくて済むんだよ』

よく鈍いと言われる私だけれど、この時は、二人の気持ちがあつた。彼らが苦惱の末に、私にこの話を受けるよう勧めているのだと。

『……分かつた。私、古賀さんのお話受けるよ』

カサカサになつた伯父の手に自分の手を重ね、伯母の目を見て、はつきり言つた。

古賀さんが用意すると言つた金額は、八百万。加えて、伯母に好条件の仕事を世話してくれるという。この話を受ければ、私たちの不安はかなり和らぐだろう。

私の返事に二人はほつとした顔をしたけれど、すぐにぐつと眉尻を下げた。伯父は視線を逸らし、伯母は唇を噛む。

『ありがとう……、寿々』

『どうしてお礼なんて言うの。私は自分が結婚したいって思つたから、そう言つただけだもん』顔を歪めた伯父に、笑つてみせた。

私が結婚することで伯父たちが助かるなら……今までの恩が返せるなら、願つてもないことだ。

伯父が元氣になつて、また『うめたに』の営業を再開することができれば、それで満足だから……だからこうして見合いに臨んだ今、私にできることは、笑顔を作つて古賀さんに「これからよろしくお願ひします」と言うことだけだ。

両手をぎゅつと握つて、お腹に力を入れた。無理やり口角を上げて、懸命に笑おうとする。

けれど次の瞬間、古賀さんの吐き出した言葉が心を凍らせた。

「まさかとは思うが、好きな男がいるなんてふざけたことを言うんじゃないだろうな、寿々」

「……っ」

好きな男。

心の奥底に沈めた一人の男性の存在が、頭の中に蘇る。彼の、印象的な榛色の瞳を思い出す。せつかく、忘れようとしていたのに。

喉の奥がひりついて、視界が潤んで、私はようやく絞り出せそうだった言葉を見失つた。

伯父が倒れた日から、店は休業している。彼と会つたのは、あの日が最後だつた。夏の雨が降る中、帰る姿を見送つたあれが、最後。

彼は、どうしているだろう。私が結婚すると知つたら、どう思うだろう。いや、小さな定食屋の店員のことなんて、もう忘れていくかもしれない……

「寿々？ どうした、好きな男がいると言うのか！」

「……っ」

古賀さんが声を荒らげ、ダン、とテーブルに拳を落とす。その音と迫力にびくりとして、私は首を横に振つた。

そうだ、私はもう二度とニートさんに会えない。あの瞳に見つめられることも、声をかけてもらうことも、もうないんだ。だから、忘れなくちゃダメ。それに、私は彼のことなんて、好きになつ

てはないもの。少し、気になってただけ。それだけだもの。

「寿々！」

テーブルがもう一度強く鳴る。声の出ない私は、壊れたおもちゃのように、ただ首を横に振ることしかできなかった。

好きな人なんていません。そんな人、いません。

古賀さんは私を見て、大きなため息をついた。札束を一つ取り上げ、私の目の前で振る。

「これが欲しいんだろう？ そのために俺と結婚すると決めたんだろう？ お前は俺に買われたんだ。さあ、理解したなら、『よろしくお願います』と言ってみる！」

視界の端で、伯母が両手で顔を覆ったのが見えた。肩が小刻みに揺れている。

ダメだ、泣かせちゃダメ。そんな風に悲しませないために、私はこの縁談を受けたんだから。

「はい」と言わなきゃ、せめて頷かなくちゃ。

そう思うのに、体は金縛りにでもあつたように動かない。

酸欠の金魚みたいに口をパクパクさせる私を見て、古賀さんが「寿々！」と声を張り上げた。

「す、寿々ちゃ……。ごめんね……ごめ……」

伯母が繰り返す。両手の隙間から漏れるその声は、古賀さんの耳にも届いたらしい。「チッ」と大きな舌打ちをする。

「何だこれは。俺がすっかり悪者じゃないか。助けて下さってありがとうございます、と言うべきところだろうに」

「す、すみま……せん……」

伯母が深く頭を垂れる。

「ねえ、梅谷さん。ちゃんと聞いて聞かせてから連れてきて下さいよ。こっちは善意でやってんのに、こう嫌な気分させられちゃ堪ったもんじゃない」

言いながら、古賀さんは私の鼻に紙の束を押し付けた。そして、ねっとりした猫なで声で「寿々？」と呼ぶ。

「この価値が分かるだろ？ それならきちんと挨拶してごらん」
そう言われても、私の口からは一向に音が出てこない。

三人だけの空間は、室内が歪みそうなほどに空気が張りつめる。きっとこのままでは破裂してしまふ。そう思った時だった。

「お客様！ 困ります！」

廊下の方でバタバタという足音と、仲居さんらしき女性の声があった。

「困ります！ そちらは他のお客様がおられて……っ」

さっ、と障子が開く。そこに立っていたのは、茶色の髪をバックに流した、とてもかっこいい男の人だった。

すっきりした小さな顔に、切れ長の瞳や高い鼻梁、きゅっと結ばれた唇がバランスよく収まっている。すらりとした体にはグレーのスーツを纏っており、それがよく似合っていた。

厳しい顔をしたその人は私を見下ろし、鋭かった眼差しをふっと和らげた。色素の薄い瞳を見て、

私の心がフリーズする。

……え？

「誰だ？ 部屋でも間違えたかね」

私から男性に視線を移した古賀さんが、苛いら立ったように言った。

「早く出ていきなさい、失礼だろう。ああ、君。彼をどうにかしなさい」

慌てて男性の後を追ってきた仲居さんに、古賀さんが命じる。だけど男性は、古賀さんに顔を向けて言った。

「あんたに、用があるんだ」

その声を聞いて、私は彼が誰なのか確信した。服装も髪型も普段と全く違うけれど、間違いない。だけど、どうして？ どうして彼がここにいるの？

男性は、持っていた紙袋に無造作に手を突っ込んだ。そこから掴つかみ出したのは、帯封おびふうのされた札束。それを三つ、古賀さんと私の間にあるテーブルに放り投げる。間違いなく、本物のお金の束だ。

「な、なんだ、お前は！」

古賀さんが彼を見上げて言う。彼はそれを無視して、紙袋から札束を掴み出してはテーブルに投げる。三束から六束、そして九束。

「何を、な……」

古賀さんがさっきの私のように口をパクパクとさせる。男性はなおも札束を掴んで、放り投げる。十二、十五、十八、そして。

「これで最後だ」

最後の二つが札束の山の上に、落ちた。

一束が百万円だから、合計二千万円。古賀さんの置いたものを含めれば、このテーブルの上には三千万もの大金が存在していることになる。

古賀さんも、伯母も、止めに入ろうとした仲居さんまでも、その異様な光景に息を呑んでいる。

「梅谷さん」

空からになった紙袋を脇に投げやった男性は、伯母に呼びかけた。伯母が慌てて居住まいを正す。

「は、はい!? 何でしょう!」

「ご覧の通り、ここに二千万円あります。このお金で、寿々を買います」

「は？」

予想だにしない言葉に、伯母がぼかんと口を開ける。横にいる私もまた、呆然と彼を眺めた。

「金で寿々が手に入るのなら、この人の倍以上用意した俺が貰ってもいいでしょう?」

彼がすいと近づいて私に手を差し出した。

「おいで、寿々」

真っ直ぐに私を見て、言う。

その強い眼差しと、迷いのない言葉に押されるようにして、私は彼の手に自分の手を重ねた。

手が触れた瞬間、ぐいと引かれ、私は勢いのままに立ち上がる。榛色はしもみろの瞳が私を捉とらえて、一瞬

微笑んだ。しかし、すぐにまた鋭くなる。

「じゃあ頂いていきます。寿々、行くよ」
「ま、待たんか！」

引つ張られるようにして部屋を出た私の手首を、古賀さんが掴んだ。
「急に現れて何を言っているんだ、お前はっ。寿々は俺の嫁になるともう決まってるんだ。突然やってきたお前なんぞに渡せるわけがないだろう。寿々、来い！」

今度は古賀さんに力任せに引つ張られ、体が傾ぐ。危うく転びそうになったけれど、男性が私を抱き寄せてそれを阻んだ。ふわりと彼の香りがする。

「じゃあ、俺よりも金積んでみろよ、おっさん」

頭上で、彼が鼻で笑う気配がした。

「いくらでもいい。俺はその倍を用意してやる。どうだ？」

背後で、古賀さんのぐつと呻く声がある。

「か、金を出せばいいってもんじゃない。人買いじゃあるまいし」

「へえ。金さえあれば若い女だつて買える、つて所構わず吹聴していた人の台詞とは思えないね」

「な……なんだとっ!？」

バンと古賀さんが机を叩く音がした。その音にびくりとすると、背中に回った手に一際強く抱き寄せられた。

「俺は、金でどうとでもできるつていうあんたのやり方に倣つてやってんだ。ほら、あんたはいくら出す？ 二千万？ 三千万？ これ以上出せないんなら、黙つてな。寿々は、俺が貰う」

古賀さんが、喉の奥で唸った。

「馬鹿な、ことを言うな。お前、正気か……!？」

「至つて正気だね。さあ、行くよ、寿々」

彼が私を連れて廊下を歩いていく。後ろから、「ちよつと待て！」と古賀さんの怒鳴り声か飛んできたけれど、彼は振り返りはしなかった。

「あの、あの！」

私の手を引き、ずんずんと先を歩く彼に声をかける。

「ど、どうしてここに!？」

「あのおっさん、寿々を嫁に貰うつて色んなところで言つて回つてただろ。ちよつと調べたら今日の見合いの場所も時間もすぐに分かった。商店街の人たちから支度金は八百万つて話を聞いたから、念のためその倍以上用意した」

「ああ、なるほど」

確かに、私が多額の支度金と引き換えに古賀さんと結婚するという話は、驚くほどの速さで周囲に広まっていた。今日のお見合いのこともどういふわけだか商店街のみんなが知っていて、出がけには「耐えるんだよ」なんてしんみり見送ってくれたくらいだ。

「……じゃなくて！ そうじゃなくてですね、あの、どうしてここに来てあんなことをしたのか、つていうことを訊いてるんです」

「寿々がおっさんに数百万で買われるつて話を聞いた。金でどうにかできるならつて思つて来た」

彼があつさりと言う。しかし、その内容はそんな口調で言うようなものじゃないと思う。

「ど、どうにかつて、あの、あんな大金を！」

「大金じゃないよ、全然。寿々の値段にしちゃ、安い」

「そ、そんな……」

そんなわけない。だって、二千万だよ？

今回の縁談について聞いた商店街の人たちは、初め「いくら梅谷さん夫婦に恩があるからつて、自分を粗末にするんじゃないよ」と口々に言った。中にはいくらあればいいのかと訊く人もいた。それでもみんな、古賀さんが出す八百万という金額を聞いた途端、黙ってしまった。

彼が用意したのは、その倍以上のお金。大金以外の何物でもない。

おろおろしていると、彼が言う。

「寿々は、あのおっさんに買われたかったの？ あのおっさんの傍にいたかった？」

「ち、違います！」

思わず叫んでしまい、慌てて口を押さえた。彼がくすりと笑う気配がする。

「じゃあ、いいじゃん」

「そ、それはそうですけど。でもこんなことしてもらう理由がありません！ どうしてですか？」

彼の背中に向かって言う。

「どうしてですか、ニートさん！」

見間違えたりなんかしない。どんなに服装や髪型が変わつていようと、私には分かる。

彼——ニートさんが一瞬足を止めた。そして、振り返ることもなく、言った。

「寿々を渡したくなかったから」

「え？」

どくんと心臓が跳ねた。それつて、どういう意味……？

「金なんかで他人に渡すなんて嫌だったんだ」

「そ、それはどういうこと、でしょうか？」

「それは……」

私の手を離し、くるとニートさんが振り返った。見上げていた私と、ばちんと目が合う。

何か言おうと口を開きかけたニートさんだったが、一瞬黙り込み、きよろりと目線を逸らした。

「……それなりに、気に入ってたから」

「気に入って、ですか？」

「ああ。寿々が他人に、しかもあんな下品で下種なおっさんに端金で買われるなんて我慢ならなかった。だから、高値更新して買ったんだよ」

気に入って、とはどういう意味だろう。そんなことを考える私に、ニートさんは「とにかく」と続けた。

「俺は寿々を買えたし、寿々は嫌な男と結婚せずに済んだ。問題ないね」

「え？ ええと、その！」

再び歩き出したニートさんの背中を目で追った。

今の話で唯一理解できたのは、ニートさんが私を助けてくれたということだ。だって、彼の『買う』と古賀さんの『買う』は、響きが全然違うんだもの。ニートさんはお金で『買う』ことで、私を救い出してくれたんだ。

何事かとこちらを見てくる仲居さんや他のお客さんの視線に気付き、私も彼について長い廊下を進む。途中、振袖の裾が足に絡んでしまった。

「わ、わ！」

私がよく見て転ぶ前に、がしつと支えるニートさん。

「大丈夫？」

「ず、すみません」

顔を上げる。びつくりするくらい近いところにニートさんの顔がある。前に店で転びそうになった時より近いみたい。私は思わずぼかんと口を開けて見惚れてしまった。

肌理の細かい肌に、綺麗な顔。澄んだ双眸が真っ直ぐに私を捉えていて、もう少し近づけばそこに映っている私の顔が見えそうだった。

「私……、ニートさんの顔、こんなにはっきり見たの初めてです」

「……ああ、そう」

プイ、と顔を逸らされた。私を立たせた彼は、「追われると面倒だから、もうちょっとだけ頑張って歩いて」と促す。

古賀さんに捕まってしまうかもしれない。そう考えると背筋がぞつとして、私は足を動かした。

「外まで行けば、タクシー待たせてるから」

「寿々ちゃん！」

別の声がして前方に視線をやると、息を切らせた男性が立っていた。

それは、『うめたに』のある『ひなぎく商店街』の自治会長さんだった。呉服屋のご主人なのに、いつも粋に着こなしている着物はすっかり崩れ、髪も乱れ切っていた。

「か、会長さん？」

どうしてこんなところにいるの？ 驚いていると、会長さんは大きく息をついて言った。

「やっぱり、君の不幸を見て見ぬ振りできないってみんなで話し合っただ。商店街でできることがあれば何でもやるからさ、古賀さんのお話はとりあえず、もう少し延期しなさい」

私を安心させるかのように、にっこりと笑う会長さん。その汗ばんだ笑顔に目が熱くなる。

商店街のみんな、そんなに私のことを心配してくれてたんだ……

「大丈夫です。寿々はもうあのおっさんのところに行かなくてよくなったので」

思わず涙ぐんでいると、ニートさんが言った。会長さんが不思議そうに首を傾げる。

「君は……？」

「今、あのおっさんのところから寿々を連れてきたところです。追いかけてきたら困るので、ここで失礼します」

ニートさんが小さく頭を下げ、私の手を引いて会長さんの脇を通り抜けようとする。

「ず、寿々ちゃん？ どういうこと？」

「すみません！ 私は大丈夫です。あの、伯母をお願いします。古賀さんと二人きりなんです！古賀さん、すぐく怒って！」

ニートさんに手を引かれながら言うのと、会長さんは戸惑ったまま「わ、分かった」と頷いた。私たちは玄関を出て、大きな門扉の前まで向かう。半ば引きずられている状態の私は、草履も満足に履けないまま連れ出された。門の外にはニートさんの言う通り、一台のタクシーが停まっている。

「ほら、乗って」

「わ、わわ、あ痛！」

どん、と押されてよろめきながらタクシーの後部座席に転がり込む。反対側のドアで頭を打った。振袖の扱いに手間取りつつもどうにか体勢を整える私の横に、ニートさんがするりと座る。そして「出して」と短く言った。

タクシーがゆるゆると動き出す。声が出た気がして振り向けば、やっぱり追いかけてきた古賀さんの姿が見えた。料亭の店先で顔を真っ赤にして怒鳴っている。

「戻らんか！ 寿々！」

古賀さんは、靴も履いていない足で地団太を踏みながら叫んでいた。その後ろから会長さんが姿を見せ、古賀さんを宥め始める。そんな二人の姿がどんどん小さくなっていった。

「下品なおっさん」

なおも聞こえる古賀さんの怒鳴り声に、背もたれに身を預けたニートさんが小さく息をついた。

「でも、もうあんなおっさんと関わらなくて済むよ」

それからちらりと私に視線を寄せた彼は、ぎよっとしたように目を見開いた。

「なんだ。まだ泣いてんの」

「え？ わ、わあ、ほんとだ。え、何ででしょう！」

指摘されて、私はようやく自分が泣いていることに気付いた。まだってことは、ずっと泣いているんだらうか。

ぼろぼろと溢れる涙が止まらない。ハンカチハンカチ……って、荷物は全部あそこに置いてきたんだった！ おろおろしていると、顔をぼさ、と覆われた。

「ふあー！」

ハンカチでごしごしと目元を拭かれる。「怖かった？」とニートさんの声がする。それはいつもの、お店で時折聞いた声と同じものだった。今度は素直に、「はい」と答えられた。

少し前まで、怒鳴られたり、大きな音をたてられたりして、すごく怖かった。こんな人とこれから暮らしていかなければならないと思うと、恐怖で押し潰されそうだった。

「本当は逃げ出したいくらい怖かったんです。だから、安心、したんだと思います。だから」

ハンカチの向こうにいる人に向かって、続ける。

「ニートさんが来てくれてびっくりしたけど、嬉しかったです」

「……………うん」

私は、顔にハンカチを押し当てていた彼の手を握ってずらす。するとニートさんと目が合った。

「助けてくれて、ありがとうございま……あ」

私が声を上げると、ニートさんがふいと顔を逸らし、ハンカチを私の手の中に押し込んだ。

「後は自分で拭きなよ」

「……あ、はい」

目元を拭いながら、さつき見たニートさんの表情を思い出す。

すごく、優しい笑顔だった。いつも前髪越しにしか見ることのなかった笑顔。それはとても素敵で、胸がじんわりと温かくなった。いつもあんな顔で私を見てくれたのかな……

思わず、えへへ、と笑うと、ニートさんがこちらを向き、訝しげな目をした。

「泣いてたくせに、もう笑ってる」

「あ、えと、すみません」

「別に、いいけど。あ、その信号を右。西入山駅方面に走って下さい」

ニートさんが運転手さんに説明する。私はハンカチを握りしめて、おずおずと訊いた。

「そうだ。あの、私、これからどこに行くんでしようか」

「俺の家」

「え？」

「え？ じゃなくて。俺、さつきも寿々を買ったって言ったよね？ だから連れて帰ってるよ」

「は……」

私は、ニートさんの端整な横顔を見つめた。

「ええと、連れて帰るということは、その」

「これから、一緒に住んでもらうってことだけど」

「いつしょ……、一緒ですか!？」

声が裏返った。

「そう。だって、買ったものは持って帰るでしょ」

確かに、それはそうだけど。でも！ 驚きすぎて、あわあわと意味のない言葉ばかりが口をつく。

そんな私にニートさんが視線を向ける。

「死ぬほど嫌？」

「え？」

「俺と暮らすの、死ぬほど嫌だって言うなら、考えるけど」

色素の薄い瞳が私を捉える。返事を待つように口を嚙んだニートさんと、束の間、見つめ合う。

「……じゃない、です」

「ん？」

「嫌じゃ、ないです」

口が勝手に動いていた。

嫌、なんてことない。状況に心がついていかなただけで、私は全然、嫌だなんて思っていない。

ニートさんがわずかに目を細めて、口角を持ち上げた。

「そう。なら、問題ないね」

「は、い……」

「それより、いい加減その『ニートさん』って呼び方やめてもらえるかな？」

「え？ わ、私そう呼んじやってましたか!？」

いけない！ 今まですつとそう呼んでたから、うっかり口に出していたかも！

両手で口を押さえた私に、彼は「何度もね」と言った。

「今日だけじゃないよ。店の中でも、寿々はたまに俺のこと、そう呼んだよね」

「ええ!？」

さあ、と血の気が引く。聞こえてたの!? 彼に聞こえないよう気を付けていたのに！

「ニートではないよ、俺。そう見られても仕方ないのかもしれないけど」

彼はひょいと肩を竦め、呆れた口調で言うのと、車窓の向こうに視線を投げた。私はひたすら慌てる。

「あ、あの、すみません！」

すぐく失礼なあだ名なのに、聞かれてたなんて！ 私はぺこぺこ頭を下げる。

「な、名前知らなかったし、だからその。でもすみません。一応最初は日替わりさんって呼んでたんですけど、その」

「日替わりさんっていうのも、どうだろうな」

くす、と小さく笑う声が出て、顔を上げる。すると、彼はちらりと私に視線を向けて言った。

「慧」

「え?」

「慧。曰下部慧。それが俺の名前」

「慧、さん」

口の中で何度も繰り返す。くさかべ、けい。けいさん。慧さん。

「そう」

「慧さん。はい、覚えました」

「うん」

頷いて、慧さんは私を見た。

「これからよろしく。寿々」

切れ長の目が、私を真っ直ぐに見つめる。もうこの瞳に見つめられることがないと思ったのは、ほんの少し前なのに。こんなことが、起こるなんて。

胸の奥がきゅつと痛くなって、少しだけ息苦しい。しかし、嫌な痛みじゃない。

私はこっくりと頷いた。

「はい」

古賀さんの前で必死に絞り出そうとして、でも出てこなかった二文字。それが彼の前だとすんなり口について出る。

車はそれから街を走り続け、『うめたに』のある商店街を通り過ぎ、市の中心部に位置する駅の方面に向かった。

「慧さんって、どこにお住まいなんですか？」

「てっきり商店街周辺に住んでいるものだと思っていたけれど。」

「駅前」

「ええ、そうなんですか！」

駅前から商店街までは、車で片道二十分ほどかかる。そんなところから通ってくれていたなんて驚いていると、慧さんが「物好きだと思ってるんだろ」と言った。その口調は少しだけ不機嫌そう。「いえ、そんなことは思っていないです！ わざわざ来ていただいてたんだあって、嬉しくなっただけです！」

「ふるふる」と首を振る。そんな私に、慧さんはつんと顔を背けて言った。

「駅前の辺りには定食屋が少ないんだ。だからあそこの商店街まで足を延ばしてただけ」

「ああ、そうですね。駅前ってお洒落しゃれなお店ばかりですもん」

納得した。

昔ながらの雰囲気を残した商店街とは違い、駅周辺はすぐく華やかな場所だ。ブランド店が立ち並び、行き来するのはみんなお洒落な人たち。

「駅前にばかり買い物客が集まるから、商店街はいずれすた廃れちゃう、ってみんな言ってたんですけど、そんなこともないですね。慧さんみたいな人が来てくれるんだもん」

「俺みたいなのが大量にいればね。あ、その目の前のマンションで停めて下さい」

慧さんの言葉に、タクシーがゆるゆると停まる。彼に促うながされて降りた私は、目の前に現れた広い

エントランスにポカンとしてしまった。

「え……、ここが、慧さんのお宅です、か？」

「うん。十六階」

「ほえー」

真っ白な外観の高層マンション。ぴかぴかに磨き上げられたエントランス。厚いガラス扉の奥に広がる大きなロビー。まるで高級ホテルのようだ。

タクシーの支払いを済ませた慧さんが、さっさと中に入っていく。カードキーをエントランス脇の小さなディスプレイにかざすと、扉が開いた。こんな光景、今までテレビの中でしか見たことなかったもので、間抜けな声を漏らすことしかできない。

「ほえー」

中に入れば、木をふんだんに使った、温かな印象のロビー。奥にはエレベーターの扉が二つ並び、その手前にはホテルのようなカウンター。そこに上品そうなおじさんがいた。

「お帰りなさいませ、日下部さま」

「ああ、どーも。ほら寿々、行くよ」

きよろきよろしていると、慧さんに手首を掴つかまれた。ぐいぐいと引かれて、エレベーターに乗せられる。

「あの、あの、慧さんって何をしてる人なんですか？」

静かに上昇していく箱の中で尋ねる。こんな高そうな場所に住んでるなんて、一体どんなお仕事

をしているんだろう。慧さんは、「俺の名前に聞き覚えはない？」と言った。

「ないです。あの、もしかして有名な方なんですか？」

「んー、ごく一部では、かな。寿々、漫画とか読む？」

「あ、はい！『君に捧ぐ恋』とか『初恋ソルジャー』とか大好きです！」

「少女漫画か。そっか」

「ふむ、と慧さんは呟いて「少年漫画は？」と訊いてきた。

「読んだことないです」

「じゃあ、知らないか」

話している間に、十六階に着いた。私は慧さんの後をほてほてとついていく。玄関らしきドアの横には、下のエントランスにもあった小さなディスプレイが取り付けられていて、カードキーをかざすとドアが開く気配がした。な、なんてハイテクなんだろう。

「ほえー」

「それはもういいから。入って」

「あ、はい」

慧さんの後に続いて中に入り、草履を脱いでから周囲を見渡す。わあ、玄関広い。天井高い。

玄関に置かれているのは大きなシューズロッカーだけで、その上にはやはりたった一つ、置物が置かれていた。それは今、小・中学生に大人気の漫画のマスケットキャラクターだった。

「これってマジスクのホムラですよね？」

真っ赤な炎を纏った、ウサギに似たデザインのそれを指して訊いた。

「寿々、マジスクは知ってるの？」

「はい。だつてすごく有名ですもん。私もアニメなら何話か観ました」

『マジカルスクールデイズ』。通称マジスクとは少年誌に連載されている漫画で、魔法学校に入学した兄妹が色んな魔法を覚えながら、魔法世界に君臨する悪の組織に立ち向かっていくというストーリーだ。主人公の二人は色々な精霊と仲良くなり、彼らに力を貸してもらう。そして、二人にいつもくっついてくる精霊の一人が、このホムラなのだ。たくさん精霊の中でも一番人気のキャラで、グッズもたくさんある。

『マジカルスクールデイズ』の世界観は緻密に作り込まれていてリアリティがあり、大人でも夢中になってしまう。今や一大ブームと呼ばれるほどの人気作で、アニメ、映画、ゲームにもなっており、果ては実写化までされるといふ噂。大型アミューズメントパークでマジスクのアトラクションが完成した時には、連日ワイドショーでその話題を取り上げていたくらいだ。

「『うめたに』のお客さんにも、ファンがたくさんいました。子どもたましじやない、深い作品だつて教えてもらったんですよ」

「ふうん」

「慧さんも、好きなんですね」

ホムラの真っ赤な鼻先をチョンと突いて、慧さんを見る。

いつもあんなに漫画を読んでいた慧さんだ。マジスクのファンであつてもおかしくない。

しかし、慧さんは「ファンじゃないよ」と言った。

「え、そうなんですか？　だってホムラを飾ってるのに」

「これはアニメ制作記念に出版社から貰ったんだ。仕舞っておくのも悪いし、置いてる」

「せいさくきねん？　しゅっぱんしゃ？」

首を傾げる。読者プレゼントとか、そういうものに当選したとか？

慧さんがホムラを手にとった。

「俺、マジスクの原作者なんだ。本名の曰下部慧で、今でも週刊誌で原作書いてる」

「ほ、え？」

「原作者。マジスクを書いたのは、俺ってこと」

「え、だってマジスクの作者さんってテレビに出てて……」

モデルのようにかっこよくて（慧さんも十分かっこいいけれど）、タレントのようにトークの上手い男の人だったはずだ。あっけらかんとした人柄が人気で、バラエティ番組でよく見かけるから私も知っている。

「それは作画担当の桃里真佑だ。俺はストーリー担当」

「原作……」

そういえば、マジスクは作画する人と原作書く人が別だってテレビで聞いたつけ。どちらか一人がメディアに露出するのが嫌っていて、名前と年齢しか公表していない、とか何とか。

確か名前はひらがなで『くさかべけい』。年は二十六、いや、七だったかな。

くさかべけい……？　くさかべ、けい？　曰下部慧！？

「……ほ、ほわあ！　それって、すごいことなんじゃないですか？」

大きな声を上げてしまった。だってマジスクは『超』がつくくらい有名な作品なんだもん。そんなマジスクの作者さんの一人が、慧さんだったなんて。こんな豪華なお家に住めるのも当然だよな。しかし慧さんはどうでもいいことのように肩を竦めた。

「まあ、ニートじゃないってことが分かってもらえたらいいよ。ほら、とりあえず奥においで」

「は、はい」

慧さんに促されて奥へと進む。通されたリビングダイニングは、梅谷家の私の部屋が三つくらい入りそうな広さだった。大きな窓の向こうにはウッドパネルを敷いたバルコニーが広がっている。

「わあ」

玄関と同じく、ソファやテーブルなどといった家具を最低限置いた、シンプルな室内だ。でも全体的に綺麗に整っていて、慧さんの匂いがする。

「今日からここで一緒に暮らす……んですよね」

思わず口になると、鼓動がドキドキと速くなる。

だって、これから二人で生活するわけだよな。私は女で、慧さんは男の人で、それってもしかして、もしかしなくても男女の関係とかになる、の？　私のこと、気に入ってたって言ってたし……ふと、さっきまで一緒だった古賀さんを思い出す。あの人は、私をそういう目でしか見なかった。それがあからさまな視線や口ぶりは、怖くて嫌だった。

慧さんには、そんな嫌悪感湧いてこない。だけど、でも、やっぱり覚悟とか心の準備をする時間が欲しいよ。ただ、それをどう伝えればいいの。

私の横に慧さんが立つ。ドキリとして見上げると、慧さんが首を傾げた。

「何で顔真っ赤なの」

「あ、あの。あの」

思えば、若い男の人と二人きりになった経験なんてない。こんな時、どうすればいいんだろう。

慧さんとの距離は、こぶし一つ分くらいしかない。タクシーでは触れ合うほど近かったというのに、妙に意識してしまう。そろりと一歩離れた私に、慧さんが「ん？」と呟く。そして顎先に手を添えて少し考えると、ふと私の方を見て言った。

「……よし。寿々」

「は、はい！」

「これから、寿々には家事を頼むから」

「へ？ 家事、ですか？」

「そう。料理とか、洗濯掃除。まあ、この部屋の中の家事一切と言えば分かりやすいか。いい？」

料理に洗濯、掃除……？ それって、家政婦ってことかな。

家政婦。そっか。そういうことか！

急に、心が軽くなった。ほっとすると同時に、小さな笑みを零してしまう。

そうだよね、慧さんが、私に変なことするはずないよね。

『うめたに』の中だけだったけど、彼との付き合いは短くない。いつも私のことをそっと気にかけてくれた彼が、古賀さんみたいに私をどうしようなんて考えるはず、ないじゃない。

私ったら、考えすぎちゃったみたい。恥ずかしい。

「寿々。どう？」

「わ、分かりました！ 私、慧さんのご恩に応えられるよう頑張ります。二千万円分、必死に働きます！ 少しでも返せるようになります！」

慧さんが私を助けるために使ったお金のことを思えば、何でもできる。慧さんが快適な生活を送れるよう、精いっぱいのことをしたい。

「返さなくて、いいよ。買ったって言っただろ？」

ふっと慧さんが笑う。その笑顔はやっぱり優しく、私の胸の中は温かくなる。

「慧さん。どうぞ、よろしくお願いいたします」

慧さんに向き直り、深々と頭を下げる。その頭に大きな手のひらがポンとのった。

「よろしく、寿々」

「はい！」

こうして私は、二千万円でこの人に買われたのだった。

駅から徒歩三分のところにある、二十階建ての瀟洒なマンション。

真っ白な外観に、磨き抜かれた綺麗なエントランス。木をふんだんに使った、温かみのある広いロビーには、観葉植物が絶妙なバランスで配置されている。マンション内にはフィットネスルームやラウンジバー、パーティールームに屋内プールまであり、住人であれば自由に使うことができる。フロントカウンターにはコンシェルジュというお仕事をする上品なおじさんがいて、困ったことがあればいつでも相談に乗ってくれるそうだ。

私が住まわせてもらっているのは、十六階の南側のお部屋。

十八畳のリビングを擁した3LDKは、二人で暮らすには十分すぎるほど広い。それに加え、三畳ほどのバルコニーまである。敷かれたウッドパネルの上には木製のロッキングチェアが置かれていて、私のお気に入りの場所だ。日差しを受けながらゆらゆらと揺られるのは、とっても心地いい。一緒に暮らすのは、日下部慧さん。二十七歳。身長は百七十五センチくらいで、すらりとした体躯はモデルさんのようにバランスがとれている。柔らかな茶色の髪はサラサラで、前が長め。普段は前髪に隠されているのだけれど、その顔は見惚れてしまうくらい綺麗。髪と同じ、色素の薄い榛色の瞳が印象的だ。

少しぶっきらぼうで、どちらかというと無口。だけど、とても優しい人。

そんな慧さんは、子どもから大人にまで熱狂的に支持されている『マジカルスクールデイズ』という漫画の原作者だ。しかし世間には名前と年齢しか公表していない。

私は今、その慧さんと、ハイソなマンションで一緒に生活しています。

しかし、その生活には未だ慣れなくて、毎日が失敗の連続。今朝もまた失敗してしまった。

リビングの大きな窓から朝日が差し込む。眩しいくらいにキラキラした日差しは、オニグルミの木で作られたシックなダイニングテーブルの上にもまで届いていた。

テーブルに着いた慧さんは、少しだけ寝癖のついた頭を掻いて、大きな欠伸をする。そして、目の前に鎮座したお皿を指差した。

「寿々、これ何。食べ物？」

「はい。その……ガレット、と呼ばれるものだったはず、なんですけど」

慧さんの向かいに座った私は、もごもごと答えた。

じゃがいもとウインナーのガレット——を朝食として作ったつもりだったのだけれど、慧さんの目の前のお皿には、真っ黒に焦げたお好み焼きのようなものが、でんと載っかっている。

料理本の通りに作ったはず、なのに。どうしてこんなことになっちゃったんだろう。

本当は作り直したいけれど、材料は使い切っちゃったし、これ以上慧さんの朝食を遅らせるわけにはいかない。一番マシなものを出してみたものの、やっぱり真っ黒なことには変わりはない。

「食べ物ね。じゃあこれが今日の朝食ってわけだ」

「はい……。あの、他のものを作った方がいいでしょうか」

「待ちくたびれたから、いい」

慧さんがフォークをガレットに差し、一口食べた。もぐもぐと咀嚼して、「苦い」と言う。

「中に入ってるの、じゃがいも？ 生焼けみたい。がりがりしてる」

「ええ!? ちゃんと火は通したつもりだったんですが!」

自分の分のガレットを慌てて口にする。

苦い。そして、火が全然通ってない。こんな料理とも呼べないものを作ってしまったなんて……

「うう、なんででしょう……」

「火力が強いんだ。だから表面だけ黒焦げで、中まで火が通ってない」

「火力、ですか……」

キッチンを振り返る。この家のコンロはIHクッキングヒーターで、火加減が全然分らないのだ。梅谷の家は、家庭用も業務用もガスコンロで、火の具合は目で確認できたのだけれど……

それ以前に、私は料理があまり得意じゃない。と言うより、『苦手』・『下手』の部類だ。

伯父や伯母から何度も指南してもらったのだけれど、どういうわけだか上手くならなくて、一度中華鍋から大きな火柱を上げてからは、料理と距離を置いていた。伯父たちも、「無理に覚えなくっていいよ」と言ってくれたので、それに甘え切っていたのだ。いずれはきちんと作れるようにならなきゃと思っていたけれど、もっと早くにやる気を出せばよかった……

後悔しきりの私の前に、慧さんは淹れたてのブラックコーヒーで口の中のモノを飲み下し、眉間

に皺を寄せた。

「これは濃すぎ。コールタール飲んでみたい。どれだけ豆使ったの？」

「え？ ええと、ええと。豆っていうか、インスタントコーヒーを豆用のスプーンに二杯、です」

「うん、多い。次は少し減らそう。とりあえずミルクと大きめのマグカップくれる？ 薄めたい」

「はい!」

半分泣きそうになりながら、冷蔵庫に走った。

慧さんとの生活を始めて、十日が過ぎようとしていた。

その間、私は自分の無能さを痛感するばかりだった。私って、どうしてこうも鈍くさくって役立たずなんだろう。慧さんにまともな食事を提供できなかった試しがない。一生懸命作っているつもりなのに、いつも失敗してしまう。今まではコーヒーが薄すぎたから、今日は濃い目にと思ったのに……食事以外でも、失敗を繰り返した。まず、洗濯機を満足に使いこなせず、慧さんのセーターを子どもサイズに縮めてしまった。だって、こんなボタンが色々ある全自動ドラム型なんて初めて使ったんだもの。

そして、ようやく洗いがった洗濯物をバルコニーに干したのだけれど、これも失敗。景観が悪くなると苦情があったのでやめて下さい、とコンシェルジュさんから連絡が来たのだ。乾燥機を使うか室内干しをするのが、普通なんだそうだ。

そうするうちに、今度は変に緊張してきて、気を付ければ気を付けるほど空回りしてしまう。お

店でやり慣れた食器洗いでさえ上手くできなくて、既にグラスを二個割ったくらいだ。

「……すみません。私、全然役に立たないですよね」

慧さんが私に使った二千万円のことを思えば、もつとちゃんと働かなくちゃいけないのに。情けなくって、少し涙が滲む。だけど、自分のせいだもの。泣くなんてダメ。

「ふむ。まあ、そろそろまともな食事はしたい。このままじゃ病気になるし」

黒焦げのガレットを胃の中に収めた慧さんが、マグカップに口を付ける。中身はミルクをたっぷり入れてカフェオレにした元濃厚コーヒード。

「寿々はさ、『うめたに』でたまにだけど、厨房に入ってたよね。ということは作れるメニューがあるんだよね？」

「え？ あ、はい。卵焼きと焼き魚は作れます。お味噌汁も、何とかできると思います」

その三つだけが、私の作れるメニューだろう。魚は Grill にお任せだったし、卵焼きはなんとか巻ける。……焦がすこともあったけど。お味噌汁も、多分大丈夫だと、思う。

「よし、分かった。これからは、和食メインで行こう。とりあえず朝は味噌汁と卵焼きだけ作って。夜は味噌汁に焼き魚だな」

コトン、とマグカップを置いた慧さんが言う。

「え？ でも、同じ献立だと飽きちゃいませんか」

「そう思うなら、工夫することを考えてみたらいい。卵焼きならネギを混ぜる、ジャコを混ぜる、味付けを変えてみる。味噌汁は具材を変える、だしや味噌を変える。その二つを作り慣れたら、副

菜を作ってみることにしようか」

「工夫、ですか」

「そう、工夫。寿々は、不器用なくせにチャレンジしすぎなんだ。自分の器がちっさいことをもう少し理解しろ」

「ちっさい……」

納得して、コクコクと頷いた。確かに、作れもしないものを上手に作ろうとしていた。

「そう、ちっさい。そのちっさい器なるの事をすればいいんだよ。それと」

慧さんが立ち上がる。

「俺は別に、寿々に懐石やフレンチのコースを作る腕を求めてない。寿々が作れるものを食わせてくれたらそれでいい」

「でも作れるもの、すごく少ないです。私」

思わず声が小さくなる。これまで料理に消極的だった自分が情けない。

慧さんは項垂れた私の頭にぼんと手を置いた。顔を上げると、髪をぐしゃぐしゃと掻き回される。「わひゃー！ な、なんですか？」

「それでいいって、俺が言ってるんだからいいじゃん。さて、午前中は仕事部屋に籠もるね。昼飯は、そうだな。おにぎりでも作って……って、作れる？」

「あ、はい。それは、大丈夫です」

「うん。余計なことしないでいいから、塩だけ使うこと。じゃあ、ごちそうさま」

空っぽになったお皿とマグカップを片づけてから、慧さんは仕事場に行っている一室へと去った。「はあ……」

二人掛けのダイニングテーブルに突っ伏して、私は大きなため息をついた。慧さん、私がこんなにグズだなんて思わなかっただろうな。ああは言ってくれたけど、私を買ったことを後悔してるかも。

十日前、二十万円で買われた私が、慧さんと「よろしく」と挨拶を交わした後のこと。

慧さんは伯母に連絡をしてくれた。私の行方を心配していた伯母は、慧さんがあのニートさんだと分かると、『ええっ!?』と叫んだ。離れた場所で耳をそばだてていた私にも届くくらいの大声で。慧さんが顔を顰めるのが見える。耳がキーンとしたに違いない。

「というわけで、寿々さんは俺のところで生活させます。あのおっさんのことを考えたら、そちらに戻るわけにもいかないでしょう?」

確かに、私が梅谷の家に戻ったとなれば、古賀さんが押しかけてくるのは目に見えている。

「それに、俺はあの金で寿々さんを買ったわけです。ええ、ですから俺の用意した現金はお受け取り下さい。いえ、そうじゃないとこちらが困ります。では、寿々さんに代わります」

慧さんに電話を渡され、「もしもし」と言うと、伯母が堰を切ったように話し始めた。

聞けば、あれから古賀さんは、警察を呼ぶと大騒ぎしたらしい。

『古賀家の主たる俺にこんな恥をかかせて、ただじゃ済まんぞ。あんなちっぽけな店、潰すこと

だってできるんだからな』

と、伯母を怒鳴りつけたとか。それをどうにか押し留めたのが、自治会長さんだった。会長さんは、古賀さんのあまりにも横暴な物言いにひどく腹を立てつつも、伯母を庇い、取り成してくれたらしい。そのおかげもあって、伯母は今回の縁談を正式にお断りできたという。

『結局金か! なんて怒鳴られちゃったけど、あんなにお金を振りかざしていた人の言葉じゃないわよねえ』

「あの……伯母さん、大丈夫? 古賀さんって、あの辺りの名士だし」

こんな形でお断りしてしまつては、伯母たちの立場がなくなるかもしれない。おどおどと訊いた私に、伯母は『大丈夫』と力強く笑った。

『会長さんをはじめとした商店街のみんなが守ってくれるもの』

「本当?」

『ええ。みんなね、寿々ちゃんが好きな人と逃げたつて言ったら、すつごく喜んでたわ。それに、寿々ちゃんの幸せのためにも協力しようつて言ってくれて』

「え!?」

思わず、近くにいた慧さんを見る。慧さんは私に気を使ったのか、少し離れた場所に座つて漫画本を読んでいた。よかつた、聞かれてはいないみたい。

「伯母さん、どうしてそんなこと。私、好き……とかそういうの、言つてないよね?」

『分かるわよ、それくらい。会長さんだつてそう言つてたもの。あんな素敵な彼氏がいたのに、我